

技術者からの視点

●第12回●

目線

藍野大学非常勤講師 木下 親郎

外来語を取り入れることで 多様な表現を可能にした英語

現在、英語は世界で最も広く使われている言語である。これは英語がギリシャ語、ラテン語、フランス語、ドイツ語などから、適切と思える新しい言葉を柔軟に取り入れることのできる言葉であることにも理由があるようだ。

酸素は一七七〇年代にスウェーデン人が発見したが、当時のフランスの科学者ラボアジエはその性質を説明して、ギリシャ語で「酸」を意味するオクシから *oxygene* と命名した。英国人は、フランス語をそのまま取り入れている。

「オックスフォード英語辞典」の編者であったブラッドリ氏は、「英国人は語源のことなどとやかく考えずに *oxygen* を口にできるのであり、また、たまたまその原義を知った場合には、そこから科学の歴史における興味ある一齣を学ぶことができる（英語発達小史・寺澤芳雄訳・岩波文庫）」と英語の特徴を語っている。外来語の柔軟な導入により類義語が増え、かえって意味や感情の微妙な色合いの差を十分に表すことが可能となったのであるという。ギリシャ語とラテン語から造られた英語のテレビジョンあるいはTVも世界を席巻している。最近の日本語では *kaizen* や *mottainai* が世界で使われている。

オランダ語の学術用語に 由来する「視線」

このように新しい科学技術は新しい言葉を生み出す。そしてその言葉を社会がどのように取り入れるかが、その国の活力に関係している。江戸末期から、日本では多くの学術用語が作られ、それらの言葉がわが国の近代化を牽引してきたが、一度それらが定着すると、我々はそれらを日本語本来の言葉であるかのように使っている。

「視線」もその一つである。「視線」は、日本国語大辞典によると、江戸末期にオランダ語の眼科用語を翻訳した学術用語であった。それを明治の作家が「目がものを見ている方向。見つめている方向」として使いだし、明治後期にかけて一般語として定着したという。明治の作家は、「視線」という短い言葉に新鮮さを感じたのであろう。

その先には実在するものがないのが「目線」

しかし、最近「目線（メセン）」を耳にし、目にとまる機会が多い。広辞苑は第四版（一九九一年）から「目線」を「視線。もと、映画・演劇・テレビ界の語」として取り上げている。日本国語大辞典（二〇〇三年版）は「役者が演技中に、月を見あげたり、山を眺

めたりする時の目のつけどころを「目線」という。視線とはいわない（戸板康二）とあり、さらに「転じて一般に視線をいう。『目線が合う』」と説明している。新明解国語辞典は「（舞台・映画撮影などで）演技者がモデルなどの目の向いている方向、位置、角度など。俗に視線の意でも用いられるが目線は目の動きに応じて顔を動かす点が異なる」と説明している。つまり「目線」は顔の向きから判断した目の向きであって、その先には実在するものがなくてもよいのである。「真に迫る演技」という言葉があるが、これは「演技は虚の世界である」ことを認めているに他ならない。したがって、目線の目は対象を分析しようという意思を持たないのである。顔が向いていればよいのである。

本当は避けたい 重箱読み・湯桶読み

テレビのアナウンサーの目はテレビカメラを見ているだけで、語りかけている相手の姿は見えていない。まさに「目線」であり、虚の世界である。ときどき横目で原稿を覗いたり、あるいはテレビカメラに写らないところにいる関係者に目を向けたりしているのが写されることがあるが、そのときには目の先には対象物があるので実の世界である。このように考えてみると、政治家がよく使う「国民

の目線」という言葉は、申し訳ないが虚ろな演技者の目のように聞こえてしまうのである。「目線」の「重箱読み」も気になる点である。我々の世代は、「じゅうばこ」のように、語の「音」と「訓」を混ぜた言葉は、慣用となつていゝるもの以外はなるべく使わないようにと教えられてきた。「目線」は「重箱読み」（前半を訓読みとし後半を音読みとするので、蕎麦屋で蕎麦湯を入れるのに使われる湯桶《ゆとう》に由来する「湯桶読み」と言うが）なので避けたい使い方である。「モクセン」と言うよりも、湯桶読みの方が仲間内で使う俗語として好まれたのかもしれない。あるいは、「目の線」の「の」を省略した映画・演劇・テレビ界の用語だったのだろうか。文化庁の平成一九年度国語に関する調査によると、国語が乱れていると考えている人は約八〇パーセントである。アナウンサーや報道記者のようにテレビ局を代表する立場にある人は、重箱読み・湯桶読みの言葉や流行語を使用するのに慎重であつて欲しい。「目線」は慣用といえる言葉ではないと思う。

技術者には「眼光紙背に徹す」 眼が求められる

「視線」も二〇〇年以下の歴史しかもたない日本語としては新しい言葉であるが、技術者にとっては大切な言葉である。もの造りの

技術者は、製造中の製品をしっかりと見るように教育されている。自身の技術力向上のためにも、世の中にある「もの」をじっくりと観察する習慣を持つている。そのためになじしい「視線」が必要になる。問題点を見つけ、偽せものを見破る眼である。

製品を見れば、設計者の意図がわかるといわれる。大きな構造物では、外形をみればどのような計算で設計を行ったかの推測ができる。接続部分がボルトであるか、溶接であるかも興味のあるところである。技術者の視線は、ものの内側にもせまる。飾り板で隠されていても飾り板の形状、材質、留め方によって内部の形を想像するのである。従来の製品に比べて小型、薄型になり軽量化された製品を見れば、その製品の設計方針を容易に推測することができる。

優れた製品であればあるほど、設計者の意図が外観に表されている。建築物には、難しい構造設計を行っているものがあるが、それは意匠設計を行う建築家のこだわりを示したものである。実の世界に携っている技術者の眼は「目線」ではなくて、「視線」でなければならぬ。まさに「眼光紙背に徹す」眼が要求されるのである。